

令和7年度 学校評価【中間報告書】

加賀市立錦城東小学校 校長 田原 妙子 印

学校教育ビジョン

【学校教育目標】

「自分も人も大切にできる きんひがの子」

～夢をもち、心豊かに、自ら学び行動できる児童の育成を目指して～

1. 教育活動に関する重点努力事項

確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成

～知・徳・体のバランスのとれた児童の育成～

2. 学校経営に関する重点努力事項

①組織的な学校運営

②教職員がやりがいを感じながら、生き生きと働く学校づくり

評価の項目	今年度の重点目標	具体的な取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	「子どもに委ねる授業」に取り組む。	・教育課程の工夫(カリキュラムマネジメント)に取り組み、「子どもに委ねる授業」の実現をめざす。 ・BE THE PLAYERプランの計画・実行。 ・児童自身が「自分で」「自分から」取り組む意識を育むために、学習集会や振り返りなどの機会を設ける。	教務主任 研究主任	言われたことには、素直に取り組むことができる児童が多い。一人一人が「自分で」「自分から」学習に向けて方法を選んだり、進んで取り組んだりすることに課題がある。	【満足度指標】児童アンケートを行い、各自の学習の取組を振り返らせる。	「自分から」「あきらめずに」学習に取り組むことができたと答えた児童の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A		「自分からあきらめずに、ゴールやめあてに向かって取り組むことができる」のアンケート項目に対し、肯定的評価をした児童が96.7%であった(「そう思う」が58.7%、「どちらかといえばそう思う」が38.0%)。児童の様子から、どうしても学習に意欲が持づらい子、集中が続かない子もいる。1時間の流れや単元の流れなど見通しをもつようにしたことで意欲的に取り組むことができたり、「こうしたらしい」がわかる手立てがあると頑張ることがでたりする子もいる。どの子も「自分から」「あきらめずに」取り組むことができる手立てを全学級で実施していく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	児童を中心として継割り活動を企画し、「自分もみんなが楽しい学校」づくりを支える。	6年生を中心として継割り活動を企画し、「自分もみんなが楽しい学校づくり」の一員として全校で取り組む。企画委員会を軸として、「自分もみんなが楽しい学校」にするためにどうすればよいか、児童に考えさせる。各月の生活目標をもとに委員会全体で達成するための行事を企画する。	生徒指導部	先生に言われたことはできるが、自分から行動を起こす児童はほとんどいない。自分たちで学校を良くしようとする意識を高め、自分たちで考えて主体的に行動させていく。	【満足度指標】児童アンケートを行い、「自分もみんなが楽しい学校」づくりに力を入れたかどうか振り返らせる。	「みんなが楽しい学校にするためにしていることがあるか」と答えた児童の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A		学期末の生活アンケートで、みんなが楽しい学校にするためにしていることがある児童が146人いて全校の約98.6%であった。友達を誘って仲よく遊んだり、自分から挨拶をしたりする児童が全体の70%を超えていた。一方で「授業で話し合うときに自分から友達に声をかけている」を選んだ児童は全体の30%であった。2学期は、学習指導部と連携しながら、企画委員会を中心として全校に向けて授業の参加意欲を高めていく取り組みを行っていく。
	いじめや不登校の未然防止のため、生徒指導の4つの視点を生かした授業に取り組む。	生徒指導主事	本校の実態として、自己肯定感が低い児童が多く、共感的な人間関係が希薄である。生徒指導の4つの視点のうちの、「自己存在感の感受」「共感的人間関係の育成」に着目し、視点に沿った取り組みをしていく。	【努力指標】毎月チェックシートに〇をつけ、各自で自分の取組を振り返り、意識を高める。学期に一度、児童の実態に即して児童アンケートを取り、児童の実態に即した取組になるようにする。	職員全体の「生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりチェックシート」の達成率 A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	教職員のチェックシートを集計する。	A			7月末に行ったチェックシートの集計の結果、達成率は98%だった。4月の集計では達成率が94%であり、どの教員も1学期は一貫して生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりを意識していたことが分かった。一方で、教員によっては1学期を通して達成できない項目もあったので、2学期は生徒指導担当がそれぞれの教員に合わせた声掛けを行うとともに、9月に生徒指導の4つの視点を生かした授業の公開を行い、教員全体で授業力を高めていく。
③キャリア教育・進路指導	目標をもって生きようし、自分の成長を振り返ることができる児童を育てる。	学期ごとに、成長メーターで振り返る機会を設ける。	学習指導部	教職員が児童の1年間の成長度合いを見える機会があまりなかった。 児童においては、自分の課題を見つけたり、目標に向かって粘り強くやり遂げたりすることに弱さを感じる。	【満足度指標】成長メーターでの振り返りを通して、自分の成長に気づかせる。	成長メーターでの振り返りを通して、自分が決めた項目が伸びたと答える児童の割合が、 A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	学期ごとに成長メーターで振り返りをさせる。	C		キャリアパスポートの成長メーターで、自分が決めた項目が伸びたと答える児童の割合が71%であった。初めから決めた項目の「できた」位置が高く、現状と変わらない子も7%いた。学校生活や行事で確実に成長はしているので、見逃さず教師が価値づけをしていく。また、エンカウンターなど自己肯定感、学級力を向上させる取組をより強化していく。
④保健管理	自分の生活を振り返り、健康的な生活習慣を確立するために自分で考え行動することができる児童を育てる	・毎週の生活チェックで、健康行動の振り返りと、できていない場合は改善していく。 ・児童のスクーンタイムを短くし、その分「早寝」や「運動の時間」をのばす。 ・メディア使用と心身の健康の関係について、関心や危機感をもてるよう児童・保護者へ働きかける。	保健主事	昨年度のアンケート結果によると、1日のスクーンタイムが1日2時間以上の児童が60%おり、また1日の運動時間1時間以下の児童43%いる。また睡眠時間が1日8時間未満の児童が47%いた。スクーンタイムの長さが児童の健康生活習慣や体力の向上に寄与している現状がある。	【成果指標】家でのメディア使用についての約束ごとを決めて、それを守ることができた児童の割合80%以上を目指す。	「家のルールを守ってメディア機器を使用することができた」と答えた児童の割合が、 A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	6月と12月のメディア・コントロール週間にアンケート調査を行う。	D		1学期の取り組みとして学級懇談会での保護者への啓発、毎週の自己チェック(生活しらべ)、メディア・コントロール週間、保健指導をおこなったが6月に実施したアンケート結果は「家でのメディア・ルールがある」家庭は71%、「ルールを守ることができている」と答えた児童は66%であり、学校の登校前に動画視聴やゲームをしたり、メディアの使用により就寝時刻が遅くなる児童の実態がある。ルールがない家庭にルールを作つてもうための働きかけとして7月に「メディア★マスターカード」を実施した。多くのご家庭が夏休みを楽しむためのメディア・ルールの見直しと温かい声掛けをして下さった。(回収率は91%)2学期はメディア機器の使用と他の生活習慣とをつなげて保健指導を行っていくことで児童に継り返し健康への害を認識させ危機感をもたせる。子ども達が決めたルールを守り達成感がもてるよう、自己の実態にあったルールを作りそれを守れるように家庭と連携し引き続き働きかけを行う。
	児童の発達段階に応じて、柔軟性の向上を目指す。	・全学年共通の準備運動として、ストレッチや体幹トレーニングに取り組ませる。 ・継割り活動や委員会活動のイベントを通して、楽しみながら柔軟運動に取り組めるような活動を委員会で企画する。	体育・健康部	昨年度の新体力テストで、柔軟性の項目において4年女子(現5年)、5年女子(現6年)、4年男子(現5年)が県平均を下回っている。	【成果指標】5月の記録に比べ、長座体前屈の記録が向上した児童の割合。	長座体前屈の記録が向上した児童の割合が、 A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	・5月に1回目の計測を実施する。7月に2回目、10月～11月の間に3回目の計測を実施する。	C		長座体前屈において5月と7月の記録を比較したときに、記録が向上した児童の割合は64.5%(C評価)であった。体育委員会での企画や体育の授業の準備体操において柔軟性を向上させる取り組みを行うことができた。柔軟性の向上は継続的な取り組みが必要不可欠だと考えられるので、2学期以降も体育の授業の準備体操での取り組みや体育委員会と連携しての企画を行っていきたい。また定期的に記録の測定を行い、柔軟性を高める意識付けをしていく。
⑤安全管理	自分の命は、自分で守ることができるよう、いざという時には自ら考え判断して行動する児童を育てる。	各学期に1回以上、避難訓練を実施し適切な経験を積み重ね、自らの命を守るためにはどうのようにしたらよいか考えられる児童を育てる。	教頭 安全教育担当	ほぼ100%の児童が、避難訓練の際、指示に従うことはできている。しかし緊張感に欠ける児童が高学年には数名みられる。自分で考え、正しい行動をとることを目指していく。	【満足度指標】自分の命を守るためにどうしたらしいのか自分で考え行動できる。	自分で考え適切な行動ができた児童が、 A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	避難訓練後、児童に振り返りのアンケートを行う。	A		「あわてずおちついで・しゃべらずふざけないで避難できた」児童は、A(とてもよくできた)B(だいたいできた)合わせて、97.5%であった。Aは80.3%で、Aの割合が高いことからも、適切な行動がされていたことがわかる。1学期は、火災避難訓練、洪水想定の垂直避難訓練、県一斉防災訓練に合わせたシェイクアウト訓練、引き渡し訓練(児童と教職員)の避難訓練、防犯訓練(1、2年)を計画的に行うことができた。2学期には、「自分で自分の命を守る」「自分の頭で考えて行動する」ことをねらいとした休み時間の避難訓練、不審者対応訓練を行う。
⑥特別支援教育	個々の児童の特性を理解し、必要な支援を行なう。多様な児童を対応するように働きかける。	・支援を要する児童について個別の記録をこまめに残す。 ・児童理解の会で課題や支援の方法について教職員の共通理解を図る。 ・専門家を招いての校内研修会を持ち、児童の特性への理解を深める。	特別支援教育コーディネーター	・学級で個々の児童について、校内支援委員会を持ち、カウンセリングや専門相談、医療機関につなげている。 ・本校のSSRでは、教室に入れない児童の個々の状態に合わせた対応ができるようになつた。	【努力指標】研修会や児童理解の会を持ち、支援の方法において検討して共有し、児童の支援に生かすことができる。	多様な特性や相互理解を深める方法について学び、児童の支援に生かすことができた職員が、 A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	教職員にアンケートをとり意識調査を行う。	B		1学期末のアンケートは93%だった。夏休み中にカウンセラーによる教職員を対象にした研修会を開いた。カウンセラーには、2学期以降は児童を対象にした心理教育プログラム(5、6年の保健体育や学活等)に入つていただけた。また、冬休みには子ども育成センターの先生方を講師に研修会を行つた。児童理解の会を毎回行なうことができた。悩んでいたことのアドバイスをもられてよかつた、名前があがつた児童をふだんの生活で注意して見たり会つたときに声かけを工夫したりすることができた等、児童の様子がよく分かり、支援に生かすことがおおむねできていた。今後は指導や支援でうまくいったことを伝え、確認・共有の場にもしていく。2学期も校内支援委員会を持つて団り感がある児童や担任、保護者に寄り添い、専門相談や他の関係機関、カウンセリングにつなげていきたい。
⑦組織運営・業務改善	明るく元気に児童と向き合うことのできる心身ともに健康な教職員の姿を目指す。	業務の見直しを進め、精選と合理化を行う等の工夫をし、自らの働き方にについて考える。また、連携・協同を進めることで、業務改善に努める。	教頭	職員の3分の2が、見直しを待つ優先順位を考へたり、見直したり等の工夫をしているが、業務が多く多岐にわたっているため改善できていないと感じる。また、連携・協同を進めることで、業務改善に努める。	【成果指標】業務の精選(削減)、合理化、分掌内での連携を工夫しながら推し進め、時間外勤務時間などを45時間以内にする。(昨年度達成率63%、延べ人數計算)	時間外勤務時間の月合計が45時間以内の教職員が(達成率人數/14人×月数)	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	D		時間外勤務時間を見直しを進め、時間外勤務時間が多かったが、下旬から夏季休業に入る7月は全員が45時間以内を守ることができた。昨年度の達成率は、63%であったことをみると、改善されているとは言い難い。勤務時間は、8時10分から午後4時40分であるが、児童が登校する前の7時30分には勤務を始め、午後7時前まで校務分掌、教材準備、保護者対応に追われているのが現状である。業務の校外移管、削減・簡素化、効率化、また、分担の見直しをさらに実現していく。教職員が明るく笑顔で児童に向かえるよう、保護者や地域にも現状を知つていただき、ご理解とご協力をいただきたい。
⑧研修	国語科を中心とした授業改善を図り、研究主題である「自ら課題を見つけて、主体的に学ぶ子の育成」を目指す。	国語科で「読む」単元を主として、単元デザインシートを活用することで、付けていた力を軸に言語活動を設定する意識を持つようになってきた。ただ、児童にとって「やってみたい!」と思える魅力ある言語活動を設定し、児童が自立した学びとなるよう授業を構想する力を必要である。	研究主任	昨年度より国語科を中心に学校研究を進めてきた。教員は付けていた力を軸に言語活動を設定する意識を持つようになってきた。ただ、児童にとって「やってみたい!」と思える言語活動を設定し、児童が自立した学びとなるよう授業を構想する力を必要である。	【満足度指標】児童アンケートを行い、国語科が「楽しい」学習であったかどうか振り返らせる。	国語科の学習が「楽しい」と感じている児童の割合が80%であった(「そう思う」が44%、「どちらかといえばそう思う」が36%)。4月にとつたアンケートの肯定的回答割合は70.9%であった(「そう思う」が37.6%、「どちらかといえばそう思う」が33.3%)。肯定的回答割合が約10%伸び、特に「そう思う」と回答した児童の割合が高くなっている。1学期は6、3、5年で研究授業を行つたこともあり、単元の見直しや付けていた力と言語活動を教員が意識できたことが要因と言える。昨年度から国語科の授業づくりについて学んできた経験も生かされている。また、本年度は外部講師を招き、国語科の授業づくりについて学んだり、教材研究をしたりする機会を開いた。2学期以降も読むこと単元における単元デザインシートの作成を徹底し、児童の実態に合った魅力ある言語活動を設定していく。	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A		国語科の学習が「楽しい」と感じている児童の割合が80%であった(「そう思う」が44%、「どちらかといえばそう思う」が36%)。4月にとつたアンケートの肯定的回答割合は70.9%であった(「そう思う」が37.6%、「どちらかといえばそう思う」が33.3%)。肯定的回答割合が約10%伸び、特に「そう思う」と回答した児童の割合が高くなっている。1学期は6、3、5年で研究授業を行つたこともあり、単元の見直しや付けていた力と言語活動を教員が意識できたことが要因と言える。昨年度から国語科の授業づくりについて学んできた経験も生かされている。また、本年度は外部講師を招き、国語科の授業づくりについて学んだり、教材研究をしたりする機会を開いた。2学期以降も読むこと単元における単元デザインシートの作成を徹底し、児童の実態に合った魅力ある言語活動を設定していく。
⑨保護者、地域との連携	学校と地域(家庭)が目標を共有し、連携・協働しながら、児童の学びや成長を支える。	コミュニケーションスクールの活動を実働化させ、保護者や地域の方のおかげで良い活動となつた。道徳のゲストティーチャーを招いての授業、実技教科を中心とした支援者が少なかったことが残念であった。	教頭	各学年の平均は、4回であった。保護者や地域の方のおかげで良い活動となつた。道徳のゲストティーチャーを招いての授業、実技教科を中心とした支援者が少なかったことが残念であった。	【努力指標】家庭や地域との連携による授業や活動を、年4回以上行う。	連携した授業や活動が各学年 A 年5回以上できた。 B 年4回以上できた。 C 年3回以上できた。 D 年2回以下であった。	実施状況を確認する。	C		米作り、家庭科裁縫実習支援、学年行事等で支援していただき、連携を行つたりすることができた。全校として関わってくださっている読み聞かせや平和学習でのお話を入れると3回以上になる。2学期以降も積極的に進めていく。それ以外にも租税教室、防犯教室などで地域の外部団体にはお世話になっている。
⑩教育環境整備	児童が安全に、また、教職員が効果的・効率的に教育活動を行うことができる環境を整える。	全教職員による備品・教材整備を計画的に行い、児童が自分で選んで活動できる場を増やす。	教頭	全体的な整備は、計3回行った。PCルームをリフォーム(「学び空間デザイン」)し、自由進度学習や総合的な学習の場としてフレキシブルに使えるようにした。計画的な整備により、効果的な教育活動を行うことができた。	【努力指標】全教職員で定期的に備品・教材の整理整頓を行う。 工夫した学習の場を作る。	全教職員で備品・教材の場の工夫のための整備を年間 A 3回以上実施した B 2回実施した C 1回実施した D 実施しなかった	実施状況を確認する。	C		児童の夏季休業を利用して、3つのグループ(外用具庫、スタジオ、きんひがルーム)に分かれて整備を行つた。今回は、特に机・椅子の一か所管理、防災備品の整理、外用具庫の中の廃棄品の処理・テントの整頓をした。暑い時期ではあったが、協力して行えた。必要な物をすぐに取り出せるようになった。冬、春と後2回、計画的に整備していく。
学校運営委員会での評価、助言	・中間)・登校の際、けがをした友達を気遣い助ける児童がいた。良い関係が築けていると思った。 ・項目の中で、学校評価の中の児童の自己評価の達成率は高いが、児童・保護者アンケートの数値の低いところが気になる。授業参観以外で、参観できる場があればよい。落ち着いて授業に取り組んでいるか、楽しい学校生活を送っているか、普段の様子を見たい。 ・メディアのルールが守れていない。家庭での親子の会話を大切にしてほしい。対人関係が希薄になっているのでは。遊び方も昔のような集団遊びが少ないのが残念。 ・子どもの話は、手をとめて必ず聞いてあげてほしい。学校での出来事を聞いてあげることが大切ではないか。						〈期末〉			